

2024年3月10日大齋節第4主日説教

歴代誌下36章14-23節

エフェソの信徒へ手紙2章4-10節

ヨハネによる福音書6章4-15節

先週の金曜日は、3月ですが雪が降りました。少し積もり、午前中には解けましたが、急に寒さが戻ってきたように思えます。気温の急激な変化に、どうぞお気を付けください。

さて、本日の旧約日課は、歴代誌下、歴代誌全体の終わりの部分です。歴代誌は、『聖書』の中の歴史書の部分に入ります。サムエル記上から続く、イスラエルの歴史、王国の歴史を記しているのです。

歴代誌は、列王記と内容が重なる部分が多くありますが、違いも多くあります。列王記が、ダビデの後継者である、ソロモン王と、その後の南北分裂後の歴史、北イスラエルと南ユダ王国の両方について記しているのに対して、歴代誌は、アダムからアブラハムの系図を最初に置き、北イスラエル王国の歴史を無視して、南のユダ王国の歴史のみを記しています。列王記と歴代誌では、歴史観が異なっているのです。しかし、イスラエルに対する評価、王に対する評価基準は共通でありまた明確です。「主の目」に適うことを行ったか、主の目に悪とされることを行ったかどうかです。「目にかなう」というと気に入られるような響きがありますが、原語の「適う」は、「まっすぐな」という意味です。主なる神様の方をまっすぐ見て何かを行うということです。「悪」の方は、一般的な悪を意味する言葉で、善悪を知る木（創世2:9）にある「悪」と同じです。

主なる神様の目の前で悪を行うという状況は想像しにくいのですが、これらの善悪について具体例を挙げれば、エルサレムの神殿で主なる神様に神殿祭儀を行っていけば、主の目に正しいことです。カナン人が信仰していたバアル神や、アッシリア人などが信仰していたアシェラという女神を信仰し、そのために神殿祭儀をすれば、主の目に悪を行ったこととなります。もちろん、心の中では主なる神様の方を向いていないが、形だけの神殿祭儀を行う場合はどうかとなりますが、預言者たちはそれを主なる神様が喜ばないと批判します（イザヤ1:11など）。イエス様の神殿批判も同じ観点を持つといえます。また、今日的感觉から言えば、自分たちの神を崇めるのは正しく、他の神を崇めるのを悪とするのは、排他的であり文化の多様性を否定しているように思えます。確かに、唯一の神という表現が、排他的であることは否めませんが、『聖書』が示す事柄は、単なる排他性ではありません。

バアルとは、農耕の神であり、平たく言えば、豊作の神です。アシェラは、女神ですが、豊作のほかに、占いやまじないがあります。いわゆる神様というと変ですが、両者とも、言うならば、人間の望みをかなえてくれる神です。

しかし、イスラエルの神様、主イエス・キリストの父なる神様はそうではありません。信じて、何を与えられるか、何を示されるかは、人間の価値観を超えているのです。人間の思いを超えて、信じることを求めるのが『聖書』の神様です。

その神観、信仰観は、歴代誌にも示されています。天地創造から始まる人間の歴史の中で、何が大切か、それを人間の思いを捨て去ることによって明確にしようとしているのです。ただし、その大切なこととは不明ではなく、極めて明確です。ご自身が創造されたものすべて、人間に関して言えば人間すべてを愛そうとされる主なる神の愛であるからです。そしてその愛に応えることが主なる神様に従うことであり、それを行う模範例として選ばれたのが契約の民イスラエルです。現在はイスラエルという国が存在しますので、理解が少し複雑になりますが、過去に存在したイスラエルもそうであり、信じ続けていたユダヤ人たちもそうであり、そして主イエス・キリストを通して主なる神様を信じる教会もそのイスラエルです。つまり、イスラエルあるいはユダヤ、そしてキリスト教会という表現をとりますが、大切なのは、枠組みではなく、人間の思いを超えて主なる神様に従うか否かがなのです。

歴代誌の終わりである本日の箇所は、その代表例の一つといえます。バビロニアがペルシアのキュロス王によって滅ぼされ、バビロン捕囚からイスラエルの民は解放されるのですが、それは主なる神様が異邦人の王キュロスの心を動かされたからだとして記しているからです。キュロス王は語ります、「ペルシアの王キュロスはこのように言う。天の神、主は地上のすべての王国を私に与えられ、ユダのエルサレムに神殿を建てることを私に任された。あなたがたの中で主の民に属する者は誰でも、その神、主がその人と共におられるように。その者は上って行きなさい」(歴代下 36:23)。この言葉で歴代誌は終わります。すなわち、この言葉から新しいイスラエルの歴史、ユダヤ人の歴史が始まるのです。新しいイスラエル・ユダヤ人の歴史の始まりを公言するのは、異邦のペルシアの王キュロスであると『聖書』は告げているのです。

排他的に思える歴代誌の価値基準には、ここまで徹底した人間的価値観の排除と、神様への服従が含まれています。わたしは、だからこそ、主なる神様を信じる人は、他者に愛をもって接することができるのだと思うのです。しかし、現実には、残念ながらそうではありません。人間の価値観を超えた存在を信じているからこそ、自分の価値観をより一層強く押し付けることが起きているからです。そして、争いや悲しい出来事が起こっているからです。また、人間的な価値観に基づいて多種多様な神的存在を信じていても、あるいは神的存在を積極的に否定していても、同じであるからです。しかし、そのようなことを繰り返してしまう人間すべてを、主なる神様は愛してくださっている。その愛を示すためにイエス様は十字架にかかってくださった、そのことを改めて確認して心に刻みたいと思います。